
神様と天使と俺

MG42

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

プロローグ（前書き）

こんばんは 悩んだ末書く事になりました。

プロローグ

ある場所で

「ヤツは見つかったか?」

「はい。人間界の日本と呼ばれる国にいるそうです」

「そうか。ふふっ これでヤツに復讐できる。待っておれ エビウスの末裔!!!!!!」

.....

人間界 日本〇〇県西山市

「今日も平凡な1日だったな」

と俺、三神一聖は呟やいた。

いつもどおり幼馴染みの雪恵と一緒に登校して、まるでお経を聴いてるような授業を受けて、雪恵が作ってくれた弁当を食べて 今、何事もなかったように下校している。

まあ別に刺激が欲しいってゆう訳ではない。

面倒事は嫌だし、争いもゴメンだ。

まあ考えても無駄だよな。

おっと考えている間に家に着いたようだ。

どうやら考えるのに没頭してたらしい。

「おっと寒いな。早く家に入ろう」

と俺は急いで家のドアを開けた。

「ふう〜ただいま」

俺は日本各地でやっている決まり挨拶を言いながら靴を脱いだ。

ただ家にいるはずの両親の返事がなかった。

「あれ???母さんがいねなあ。何処にいんだ。」

まあいいやあ とにかく自分の家に入ろう。俺は玄関のすぐ近くにある階段を登っていった。

そして俺は「一聖の部屋」と書かれたドアの前に止まる。

早く部屋に入ってベッドに入りてえ。よしあとはこの神聖のドアを開けるだけだとドアノブに手をつけようとした瞬間

性がいた。しかも……………スタイル抜群

なんて事だ。まるで天使みたいだ。何もかも包みこんで癒してくれ
ような少し妖艶なお姉さんの雰囲気を放っている。ヤバい。ついガ
ン見してしまった。女性をガン見するなんて失礼だ。いやだがこれ
は嫌でもガン見してしまうぞ!!! とくに山を横にしたような乳
に……………

「ふふっ 私の胸を見て興奮してるの??嬉しいわぁ」

と出るとこは出てへっこんでいるところはへっこんでいる謎の女
は俺にそう言ってきた。

……………うわぁ俺の好みのタイプだ。ヤバい死にそう。いやこん
な事考えている場合ではない!!!!!!!!!!!!
とにかく

「お前は誰だ!!!!!!」

俺は大声をあげて言った。

すると謎の女は言った。

「やっと見つけたわ。エビウス様の末裔を」

……………エビウスって誰???

プロローグ（後書き）

どうぞじょじかっ？

第一話（前書き）

第一話投稿します

第一話

俺は今すごく困惑している。エビウスって誰だよ。．．．．まあとにかく

「エビウスって誰だ。俺と何か関係あるのか??」

俺は謎の美女に疑問をぶつけてみた。すると謎の女は

「単刀直入に言うと、貴方様は神をも越える伝説の神帝エビウスの末裔なのです。」

．．．はは 何言っただこいつ 俺は普通の人間だぞ。ご先祖様だって普通の農民だったらしいし。

「何言っただんだよ。俺は普通の人間だぞ。」

「いえ、貴方は普通の人間ではありません。神帝の血を継ぐ者です。」

「だから何言っただよ!!!そもそもお前は誰なんだ。泥棒なら警察呼ぶぞ!!!」

俺は若干イライラしてきた。多分思考が追いつかないせいだろ。普通「あなたは神です」なんて言われたら俺と同じになるはずだ。

「申し訳ありません。自己紹介が遅れましたね。」

私は第六神位のフィチナ・ライスルと申します。あなたに仕えるために人間界に来た神です。」

と謎の女いやフィチナはそう自己紹介をした。

いやいやどうみても人間だろ。確かに人間離れた容姿だし、人間には放つてない妖艶な雰囲気を漂わせているし。でも流石に信じられないぞ。

「まあとにかくあんたが神だとしてだ。なんか自分が神だという証拠を見せてくれ。」

俺はそうフィチナに言った。

「畏まりました。一聖様」

すると何故かベッドにあつた俺の秘蔵エロ本に手を向け「ファイア」と呪文みたいなやつを唱えた。するとなんとエロ本が凄い勢いで燃えはじめたのだ。ああ！！！！！！冷静に観察してる場合じゃない。俺のお気に入りのエロ本がしかもベッドに燃え移ってヤバいことだ。

「何してんだよ！！火事になっちゃうだろうが！！！！早く消せ！！」

俺は慌てフィチナに怒鳴った。

するとフィチナは

「大丈夫ですよ。手を向けた対象にしか燃えませんか。それにしてもこんなイヤらしい本を見なくても私が慰めてあげるのに。ふふっ」

．．．何ですと！！！！！！それは是非、

「私のいっちゃんを誘惑してるんじゃないわよ！！！！！！」

俺はとっさに後ろを見た。するとそこには俺の幼馴染み静村雪江がいた。

第一話（後書き）

どうぞどうぞか？？

第二話（前書き）

一話投稿です

でも」

雪江は途中で話すのをやめて俺からフィチナに顔を向けて

「あなた、いっちゃんとはどうゆう関係なんですか??」

「私は三神聖佳といいます。一聖くんとは従姉にあたります。」

とフィチナは偽名で自己紹介をした。まあ正直に自分は神です。なんて言ったら黄色の救急車呼ばれるのがオチだもんな。

雪江は怪訝な表情で

「いっちゃん。こんな綺麗な従姉がいたんですか??初耳なんですが。」

うわあ疑ってやがる。当たり前かとか

「聖佳姉さんは両親が海外勤務で海外で住んでついこの前日本に帰ってきたんだ。」

俺は雪江にそう言いながらフィチナに「これでいいか」という目線を送った。するとフィチナは微笑えんだ。多分問題ないということだろ。

「そうなんですか。先ほどは失礼しました。初めまして私は静村雪江です。」

まあ確かに尻軽クソビッチなんて失礼だよな。多分学校のやつらが聞いたら驚愕するだろうな。まあどうでもいいや

「丁寧な自己紹介ありがとうございます。こちらこそよろしくね」

とフィチナは透きとおる美声で返し微笑えんだ。

うん 雪江の顔が赤いけど気のせいだな。うんうん
ぐうぐうと急に腹が鳴った。すげえ恥ずかしい。

「いつちゃんお腹空いたの??それなら私が作りましょうか??
いっちゃんの両親もいない事ですし」

と雪江は目を輝かせて顔近づけてきた。うわあ〜いい匂いだわ。い
やいや堪能してる場合じゃない。

「ああ、頼むよ。」

俺は雪江から少し離れて返事をした。

「わかりました。では愛を込めて作ります!!」

雪江は嬉々の表情を浮かべて俺に抱きついてきた。ああ〜フィチナ
には及ばないけどデカイ乳が気持ちいいなあ〜

「あらら、盛んな事ですね」

フィチナがからかうような表情でそんな事を言ってきた。
すると雪江は顔を真っ赤して俺から離れた。ああ〜もうちょっと堪
能したかったな。

「りよ 料理作ってきますね。」

雪江は顔を赤くしながら逃げるように部屋を出ていった。

恥ずかったんだな。そう考えていると

フィチナがいつの間にか俺に近づいていて耳元で「胸、揉んでみま
す??？」と熱い息を吐きながらそう言ってきた。

やべえ クラツときた。

「ふふっ、からがいようがありますね。わが主」

.....ですよ

と落ち込んでいる俺にフィチナは真剣な表情になって

「先ほどの続きの話をしましょうか」

そう言ってきた。

第三話（前書き）

第三話

第三話

フィチナが話しの続きを促してきた。まあ俺も聞きたい事があるし。色々聞いてみるか。

「うーんと フィチナは神様なんだよな??」

「はい。火を司る神です」

まあ確かに火の魔法みたいな放つてたしな、すると他にも属性があるのかな??

「なあ、火以外にも属性があるのか??」

「そうですね。火以外にも土、緑、水、雷、風、光、闇があります。」

うん。まるでポ○モンだよ。

「ちなみにエビウスは何の属性だったんだ??」

これは純粹に気になる。

「古の書によると、光を自由自在に動かしていたと記されています。」

つまり光属性ってやつですか。なんか光って厨二臭いよな。

「じゃあ俺は光の魔法が使えるんだな??」

「そうですね。尚、神々が使う能力は魔法ではなく超法といえます。」

「超法?? 魔法じゃないのか」

「魔法は堕天使及び悪魔が使う能力の総称です。まあ性格的には同義なんですがね。ただ消費するエネルギーが違うだけです。」

「消費するエネルギー??」

「はい、魔法は魔力を消費して術を発動しますが 我々が使う超法は超力を消費します。」

「超力って何だ??」

「超力とは、簡潔に言うとな精神力です。まあ精神力を消費すると覚えたほうがわかりやすいと思います。」

つまり精神で術を発動するだな。

「その超力が尽きるまで超法が使えるだな??」

「はい。超力が尽きると超法が使えなくなり気絶もしくは死んでしまいます。超力を回復させるには睡眠が一番です。」

まあ確かに精神力を使うから当然だよな。

「超力の定義はわかった。じゃ魔力なんなんだ。??」

「魔力は人間から吸い取った生命力を元にしたエネルギーです。」

まあ要は生命力を消費して術を発動するって事だな。

「超法、魔力と区別してありますが先も述べたとおり種類、威力共々
ほぼ同じです」

よし理解したぞ。うんうん

「いっちゃんご飯できました」

おっ いいタイミングでご飯できたな。じゃ食べに行くか。

「話しは後ににして飯食いにいこうぜ。味は保証するぜ」

「そうですね。私も喋り過ぎて腹がペコペコです。」

「よし！……じゃ食いに行くぞ！……！」

俺達は雪江がいる一階へ降りていった。

第四話（前書き）

第四話投稿です

第四話

「さあ、召し上がってください」

雪江は撫子風のお辞儀して言ってきた。

俺は手を合わせて元気よく

「いただきます!!!」

うん、やっぱり元気よくやったほうが作ってくれた人が喜ぶもんな。
雪江の方を向くと我が子を可愛いがるような笑顔を俺に向けていた。
うわあ〜

一瞬、顔が赤くなっちゃった。ゴホン とにかく食おう。腹が減
ってしょうがない。

う〜んと 今日のご飯は

なんと!!!!!!俺の大好物のトンカツだ。さすが雪江、俺の事、わ
かってるな。感心感心

「今日はいつちゃんの大好物のトンカツだよ。た〜とお食べ」

雪江は癒しの笑みを浮かべながらそう言った。

雪江、お前はいいお嫁さんになれるぞ。

「雪江、本当にありがとう。お前はいいお嫁になれるぞ。!!!!!!」
「!!!!!!」

「え えっ、あ ありがとうございます。」

雪江は顔を赤くしながら顔を背けた。

うん??何か雪江がぶつぶつ言ってるぞ。

「私がいつちゃんのお嫁さん。私がいつちゃんのお嫁さん。私がいつちゃんのお嫁さん。私がいつちゃんのお嫁さん。私が………」
はう
「

……聞かなかったようにしよう。

「早く食いましょう。冷めちゃいますよ」

俺の隣のフィチナが不機嫌そうに言ってきた。なんで不機嫌なんだ。不機嫌にするような事言ったかな??

「そ そうだな。おい雪江早く現実に戻れ。」

俺は少しつまりながらもフィチナに返事し、雪江には現実に戻ってくるように言った。

「はう 私は、一体何をしていたんでしょうか??」

ふう なんとか戻ってきたな、危うく夢の世界に行くところだったな。

「フィ．．じゃなかった聖佳姉さん。雪江の料理は凄く美味しいんだ。俺が保証する。」

危ない危ない。これからも気をつけないと。

「そうですね。それは楽しみですね。」

そして俺達は晩飯を食い始めた。

第五話

ふうふう食った食った。俺は今リビングでくつろいでいる。

晩飯を食った後、もう夜遅くだったので、雪江を帰らした。雪江は「今日は泊まる!!」とか言ってたがなんとか説得して帰らした。えっ 何故かって??. 部屋がないし、それに寝込みを襲われる可能性もあるしな。ただ「聖佳さんも一緒に帰りましょう」と雪江が言ったんだが、フィチナは「今日私はここに暮らすことになったのです」と言ったんだがそれを聞いた雪江は「そそうなんですか. いっちゃん。くれぐれも聖佳さんを襲わないように!」

とか言ってきた俺って信用されてなかったんだなとショックを受けた。

今でも少し落ち込んでいます。

とゆうことで流石に雪江を一人で帰らせるには危険なので俺が送ってやる事にした。

「いっちゃんを送ってくれるの!? やった!!!!!! 神様ありがとうっついでいます!!!!!!」

と雪江は嬉々とした表情を浮かべて神様に感謝を述べていた。

あなたの目の前に神様がいますよ。

で、無事 雪江を送り届けて今に至る。

「風呂、湧きましたよ〜」

フィチナが風呂が沸いた事を知らせてくれた。

なんか神様を使役させるなんて崇られそうだな。

そうゆえばフィチナは俺に仕えにきたとか言ってたけど

「なあフィチナ。お前が俺に仕えにきたってのは本当なのか?？」

「はい。あなたに仕えるために来ました。」

さいですか。よくファンタジーとかじゃ契りを結ぶとかあるけどどうなんだろう?？」

「フィチナ。その主従を確立するのに契りとかあるのか?？」

「あつ そうゆえば契約するの忘れてましたわ。」

フィチナって天然か?？」

いやだがそこがいい!!!!!!そもそも……落ち着こう。

「契約ってどうするだ?？」

「契約していただけるんですか?？」

「別にいいけど」

なんせこんな美人を家臣にできるんだから あんなことやこんなことを……すみません。自重します。

「で、どうするだ??」

「はい、簡単ですよ。接吻ですよ。」

なんだ接吻か 確かに簡単だな。

．．．．ええ!!!!!!!!!!

せつ 接吻!!!!!!!!!!

いや待てよ。こんな美人と接吻できるんだぞ。役得じゃないか。でも．．．．．やっぱ恥ずかしい!!!!!!!!!!

「どうしましたか。まさか恥ずかしいのですか??」
フィチナはからかう表情でそう言った。

なんだと!!!!!!!!!!ここまで馬鹿されては俺の名が廃る!!!!!!!!!!

「接吻ぐらい よ 余裕だよ!!」

「ふふ では失礼します」

うん??フィチナの綺麗な顔がドアップに あれ??なんかやわらいモノが唇に．．．も もしかしてキスされてる!!!!!!!!!!
し しかも舌が入ってやがる。

フィチナは散々俺の口の中を犯した。

「これで契約完了です。それとごちそうさま。」

フィチナは妖艶な笑みを浮かべ熱がこもった声でそう言った。

．．．．ま まあ気持ちよかったし よかったと思う。

「これで私は貴方の家臣になりました。どうぞよろしくお願いいたします。」

フィチナは丁寧にお辞儀をした。

「あ ああ こちらこそよろしく。」

つてかなんで俺に仕えにきたんだろ??

「なあ なんで俺に仕えにきたんだ??」

「悪魔の頂点にして、悪魔の生みの親 フォーリアが復活したからです。」

フォーリア………うっ 頭が い 痛い!!! なんだな
クソ

「大丈夫ですか!!!—聖様!!!—どうしたんですか!??」

頭が割れそうに痛い!!! うっ もう げんか……いだ

俺は完全に意識を失った。

第六話（前書き）

六話投稿です。

第六話

うくん ここは何処だ??

俺は確か気絶したはずじゃ。俺は上体を起こし周りを見た。

そこは何処まで続く草原だった。

いったいここは何処なんだ。こんな綺麗な草原初めて見たぞ。けど
なんだろ??とても儂いような感じがする。

「あなたがエビウス様の末裔ですか??」

背後から声が聞こえた。俺は後ろを見た。するとそこには……
……赤色の髪を腰まで伸ばした美しい女がいた。

「貴方がエビウス様の末裔ですか??」

謎の美女は先程と同じ質問してきた。

「あ ああ。そっらしいな」

「そうですね。ふふっ 昔のエビウス様にそっくりです。」

謎の美女は儂い笑みを浮かべながらそう言った。

「お前はエビウスのことを知っているのか??」

「はい。ずっと近くで見ってきましたから」

ずっと近くで見えてきた??

「お前はエビウスとはどうゆう関係なんだ??」

「ふふっ、今は教えられません。」

「なんで教えられないだ??」

「女は秘密を隠したがる生き物です。」

なんじゃそら まあいずれわかるだろ。

「で あんたは何者なんだ??」

「私は、そうですね・・・ノームでも名乗っておきましょうか。」

ノーム??なんだろ?? 悲しいような響きを感じる。まるで大切なヒトを失ったような感覚だ。

「ノーム、君は本当になんなんだ??」

「いずれわかりますよ。・・・そろそろ時間ですね。まあ今回は挨拶程度ですから目的は果たせたので、これで失礼します。偉大なるエビウス様の末裔様」

「ま 待ってくれノーム!!!」

クツ また頭が・・・痛い。俺は頭を抱え倒れてしまった。そして・・・意識をまた手放した。

第七話（前書き）

遅くなりました。すみません m () m

第七話

ここは・・・・・・・・・・俺の部屋だ。って事は俺は現実に戻ってきたのか。

俺は周りを見回した。

うん。どうても俺の部屋だ。少し散らかっているがまあ普通の部屋だ。

ガチャ

俺の部屋のドアが何者かによって開いた。

ドアを開けた張本人、フィチナは俺を見るなり、抱きついてきた。

「一聖様。大丈夫ですか！！？」

フィチナはそう言いながら俺の体を確かめるように触ってきた。

・・・・・・・・手つきがいやらしく感じるのはきつと気のせいだ。って何処触ろうとしてんだ！！！！

「フィチナ！！だ　大丈夫だから。」

俺は大丈夫だという意味を伝えフィチナを引き離れた。

危なかった。危つく男のイチモツを触られる所だった。

なにせ朝

は男の生理……もう言わせないでくれ。

つてか窓を見ると朝日が登っていた。うん。立派な朝だ。

「フィチナ。すまん 迷惑かけたな。」

俺は申し訳なく謝った。

倒れた俺を部屋まで運んでくれたんだ。さぞかし重労働だったに違いない。

「いえいえ。大丈夫ですよ。急に倒れたのはびっくりしましたけど。」

「本当にすまん。お詫びに何でも言うこと聞くから」

「何でも言うこと聞いてくれるんですか??」

「あ ああ。」

なんか嫌な予感がするのだが。気のせいだ。うん

「ふふつ。わかりました。楽しみにしています。」

「今、言わないのか??」

「はい。楽しみは後にしたほうがいいですから。」

ま まあ無理難題じゃない事を祈ろう。

「ふふつ では、着替えてください。朝食ができてます。」

「わかった。……………って今気づいたけどなんで俺の学校の制服着てるんだ??」

フィチナは俺が通ってる学校、大和学園の制服を着ていて、エプロンを着けていた。

「はい。今日から私は大和学園に通う事になりました。」

「よ よく合格できたな」

大和学園の転入試験はかなり難しい。

「はい。なんせ私はい神ですから」

とフィチナは胸を張って言った。ああ 豊満な胸が……………自重しよう。

「という事で。着替えてください」

フィチナはそう言って一階に降りていった。

俺は大和学園の制服に着替えてる事にした。

……………そう言えば夢??に出てきたノームって一体誰なんだ。それに何故か懐かしくもあり悲しくもあり、怒りも沸いてくる。

複雑な感情が俺の頭を駆け巡ってくる。

……………まあいいや。

い
ず
れ
わ
か
る
だ
ろ
う
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1972ba/>

神様と天使と俺

2012年1月14日14時18分発行